

泣こうか とぼうか

山中 恒



泣こうか とぼうか

山中 恒著

鈴木義治絵



創作児童文学選・7

あかね書房版

泣こうか とぼうか

創作児童文学選 7



＊著者

やま なか ひさし
山 中 恒

＊発行者

岡 本 陸 人

＊印刷

塚田印刷株式会社 (本文)

錦明印刷株式会社 (オフセット)

＊製本

土開製本株式会社

＊発行所

株式会社 あかね書房

101 東京都千代田区西神田 3-2-1

電話東京 (263) 0641 <代>

1974年10月5日第17刷

NDC 913 8393-14307-0027

山 中 恒

泣こうか とぼうか

あかね書房 1974

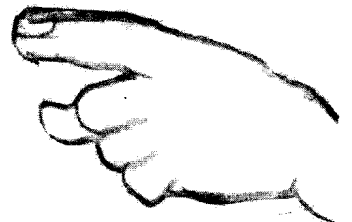
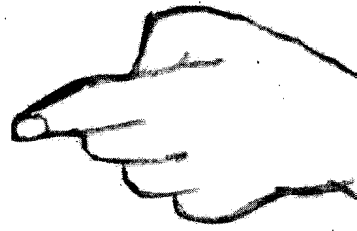
151p 22cm (創作児童文学選
7)

© 1968 Printed in Japan 著者との契約により検印廃止

落丁・乱丁はお取替します。

定価はカバー(ケース)に表示してあります。

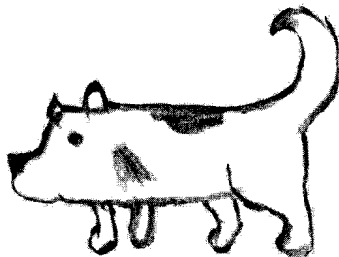
まえがき

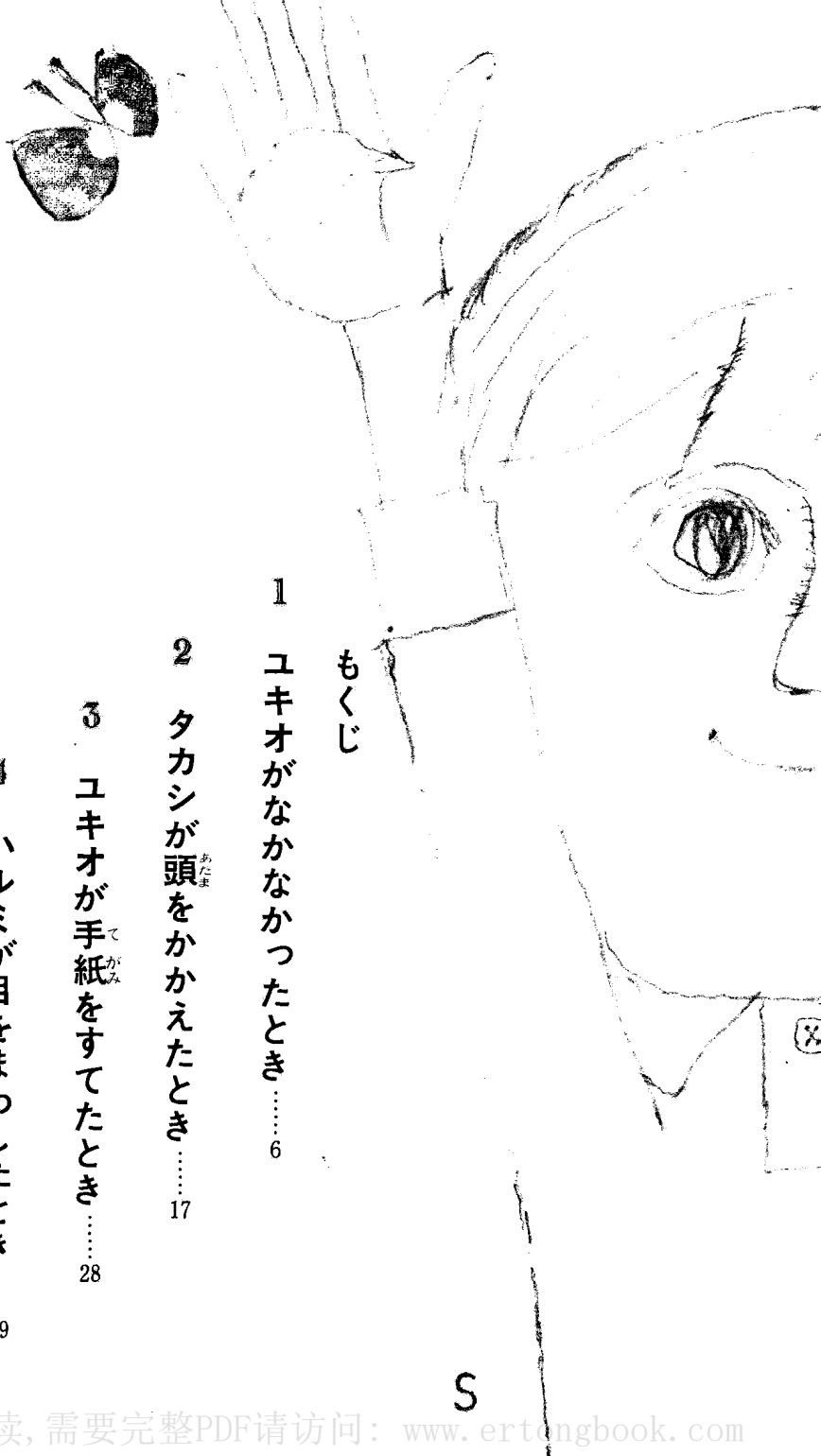


生まれてから、いちどもないたことがない——などというやつは大うそつきか、人間じやない。オニだつてなく。日本の古いことわざに「オニの目になみだ」というのがある。だから、なくときは、あんしんして大声でないていい。声がかれるほどないていい。なみだで目がとろけるほどないていい。腹ぺこになるほどないていい。気がとおくなるほどないていい。

だが、だまらなくちやいけないときもある。なかずに、じつところえなくてはいけないときもある。どんなときか、かんがえてみよう。

山中 恒





もくじ

1 ユキオがなかなかかったとき……6

2 タカシが頭あたまをかかえたとき……17

3 ユキオが手紙てがみをすてたとき……28

4 ハルミが目をまわしたとき……39

5 ユキオが気きをきかせたとき……51

S

6 タカシがばんざいしたとき……………62

7 ユキオが一〇人ぬいたとき……………74

8 ハルミが薬くすりをのませたとき……………86

9 ユキオが空そらをにらんだとき……………98

10 タカシがべそをかいいたとき……………110

11 ユキオがもてあましたとき……………123

ハルミがたすけられたとき……………136

あとがき……………150

そうてい
さしえ
鈴木すずき義治よしはる



■著者紹介Ⅱ山中 恒やまなか ひさし



一九三一年、北海道小樽市に生まれる。早大時代に童話会に所属し、当時の強力な児童文学運動体「小さい仲間」の中核的作品『赤毛のポチ』で世に出る。以後精力的な創作活動をし、代表作には前出書の他に、『とべたら本こ』『サムライの子』『青い目のパンチョウ』『火と光の子』『天文子守唄』などがある。自称「児童読物作家」である。

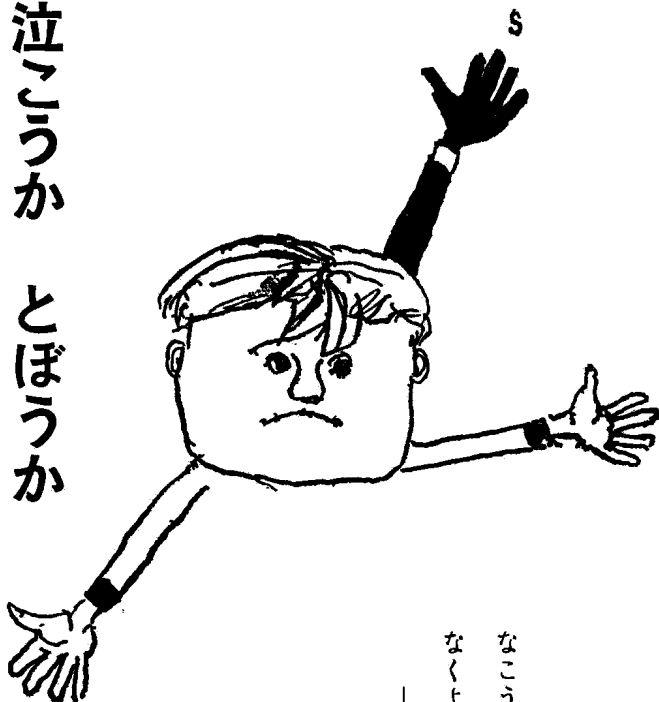
■画家紹介Ⅱ鈴木義治すずき よしはる



一九一三年、横浜に生まれる。川端学校、宮本三郎氏に師事。二科会受賞。旺玄会、三軌会受賞会友等を経て、現在はフリー。幼児向けから成人向けまで幅広い分野でユニークな活躍をしている。代表的な装画に、『アンデルセン』（講談社）『イソップ』（実業之日本社）等がある。

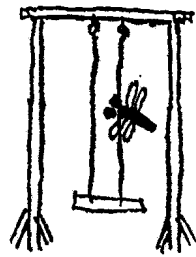
* 山 中 恒

泣こうか
とぼうか



なこうか とぼうか
なくより とぼうよ

——岡本良雄作〈仙吉じいさん〉より——



Ⅰ ユキオがなかつたとき

オダジマⅡユキオは、どんなことがおきても、ぜったいにこまりません。

それは、ユキオには、いつでもとっておきの「おくの手^て」というやつがあるからです。この「おくの手」にかかる、たいていのものは、あきらめます。学校^{がっこう}の先生^{せんせい}だって、そのユキオの「おくの手」にかかる、ためいきをつくばかりです。

どうです。「ばくもそいつを、ならいたいなあ。」「あたしにもおしえて。」なんて、思^{おも}ってる人がいるんじゃないかな？

それじゃあ、ひとつ、その「おくの手」をおしえることにしましょう。

その「おくの手」というのは、見^みたところ、たいへんやさしそうですが、どうしてどうして、なかなかむずかしいのです。けれども、その気^きになりさえすれば、れんしゅう

なんかしなくても、だれでも、すぐできます。

それは、なくことです。できるだけ、顔かおをくしゃくしゃにして、なみだを、ぼたぼたこぼして、大声おおこえでなくのです。

「なあーんだ。」と思おもうかもしれません。でも、できるものなら、やってごらんない。友ともだちから「へん！ なきむし！」といって、わらわれます。いつまでたっても、そのことをいわれるでしょう。なんといっても、なかなか、たいへんなのです。

でも、なきかたさえ、うまくやれば、いろいろと、うまいことがあるのです。

たとえば、きょう、学がっ校こうで、ユキオのだいきらいな算さん数すうのテストと、大おおそうじがあると思います。ユキオは、両方りやうほうとも、やりたくありません。そりゃまあ、だれだって、そうでしょう。両方とも、やりたいなんていう人は、きっと、よっぽどのへそまがりでしょう。

ところが、ユキオが「おくの手」をつかいさえすれば、両方とも、やらずにすまずことができます。

といつても、ただ、わけもなく、なくというわけにはいきません。ウグイスだって、オケラだって、ちゃんと、わけがあつて、ないてるのですから。そこでユキオは、この、なくきつかけをつくってくれるものを、さがします。なるべく、強^{つよ}そうなやつがいいでしょう。

まず、学級委員^{がっきゅういん}のムライ^ムイ^イタカシに、目をつけます。タカシは、勉強^{べんきょう}もできるし、せ^せが^{たか}高く^{ちから}て、力^{ちから}もあります。けれども、ま^{しょうめん}正^{しやうめん}面^{めん}から、けんかを売^うつたら、いっぺんにのさ^されてしまいます。のされてしまわないうちに、なかなければなりません。

ユキオは、なるべく、タカシのそばを、はなれません。そして、タカシの^み見^みているま^まえで、だれか、女の子のかみの毛^けを、やつ、とばかりに、ひっぱりま^ます。

いきなりそんなことをされたら、たいていの女の子は、なくか、顔^{かほ}をまっかにして、くつてかかるかの、どっちかです。そこで、ユキオは、ま^まつてま^ましたとばかり、

「なんでえ！ もんくあるか。あるなら、かかつてこい！」
つてなことを、えらそうにいうのです。





そんなことを、目のまえでやられて、タカシは、委員^{いいん}として、ほうっておくわけにはいきません。キツとした顔^{かお}で、ユキオのほうへ、近づ^{ちか}いてきます。それが、チャンスです。

「ウォーウ！」

ほえるものではありません。教室^{きょうしつ}じゅうが、びっくりするような声^{こゑ}でなきます。

ません。さつとばかり、教室をとびだして、大いそぎで家^{いえ}へ、かえってしまえばいいのです。

家には、だれもいません。おかあさんは、つとめにいってます。おとうさんもしごとで、めったに家へもどりません。首^{くび}からぶらさげているかぎで、戸^とをあけて中へはいると、それでおしまいです。

だいどころを、ひっかきまわして、なにかつまみぐいします。ひなたぼっこしながら、マンガの本が、テレビのよろめきドラマを見^みます。ひるねもします。

だれかが、むかえにきたら、大いそぎで、おしいれにかくれて、いきをころしています。いくらなんでも、うちの中へまで、ずかずかとはいりこんできて、おしいれをさがすようなものはいません。そんなことをしたら、どろぼうですから……。

オダジマリユキオは、つぎの日には、そんなことを、きれいにわすれたような顔^{かお}をして、学校^{がっこう}へいくのです。なにかいわれても、知^しらん顔。でも、あんまりうるさくいわれたら、きのうとおなじ手^てです。

いきなり、なきながら、あいてにつっかかっていくのです。あいては、たいがいびつくりしていますから、そのすきに、ぼかぼかっど、ふたつみつやって、家^{いえ}へにげてかえるのです。

そのぼかぼかも、あいてがなくなるとは、たいへんです。いざ、なくと、どこまでも、おいかけてきます。それこそ、家までおいかけてきて、ほんとうに、なくような

思いを、させられてしまうからです。

オダジマIIユキオが、この手をつかいはじめてから、もうながいことになります。ですから、いまでは、もう、だれもユキオのそばへ、よりたがりません。当番など、おなじ組になると、みんないやな顔をします。でも、なにもいいません。いったらさいご、ユキオは、おおよろこびでなきだし、家へにげただけですから。

それでも、三年生にもなると、みんな、ユキオのこの手に、のらなくなりました。あぶないと思うと、みんな、ユキオのそばから、とおのくようになりました。

そこで、ユキオは、あたらしい手をかながえなくてはならなくなりました。

*

さて、その日、それこそユキオの大きらいな、算数のテストがありました。

ユキオは、あたらしい手を、いつつかおうかと、かながえていたのです。それぐらいなら、学校へなんか、こなければいい……と思うかもしれませんが、そうはいきません。

はたらきにいつているおかあさんに、学校へいかなことなど知られては、たいへんです。ユキオのおかあさんは、ユキオいじょうになきむしです。そんなことがわかったら、なきながら、めっちゃめっちゃにたたかれてしまいます。なっているおかあさんぐらい、しまつにわるいものは、ありません。うっかり、さからったりすると、はんどろしにされるかもしれません。

ところが、その日は、朝から、なんだかちょうしがわかったのです。

ユキオのクラスに、転校生が、はいってきたのです。それは、色の白い、目の大きな、わらうとペコツと、えくぼのひっこむ女の子でした。それが、せの高さでいくと、ちょうどユキオぐらい、というので、教室の席は、ユキオとならぶことになったのです。

その子の名まえは、タカギハルミ。

みんなが、うらやましそうに、ユキオのほうを、見ました。ユキオも、算数のテストのことなどわすれて、どくだいでした。みんなは、ハルミが、かわいそうだと思っ

タカシは、タカシで、ユキオなんか、ハルミとならぶなんて、とんでもないという顔つきをしています。

休み時間になりました。みんなは、ハルミと話をしたいと、思いますが、そばに、いやなユキオがいて、にやにやしているので、えんりよをしています。

そのため、ハルミは、どうしてもユキオを、たよりにしなければなりません。ハルミは、ユキオのあとをついて歩きます。ユキオも、ひとりぼっちですから、ちょうどいい友だちができたというわけです。

「あの、このつぎ、なんの時間？ あとで時間わりをうつさせてね。」

「うん、いいよ。ええと、このつぎの時間は、……あつ！ 算数だ。テ、テ、テ、テストなんだよ。」

さあ、そこでユキオは「あたらしい手」を、つかうことを、思いだしました。ユキオのそばにるのは、ハルミだけです。やるなら、いからです。

ユキオは、運動場のすみの、ろくろの上へのぼっていくと、いきなり、ぱつと、と